

『西洋事情』から『学問のすゝめ』への一面

河 村 嘉 樹

福沢諭吉の根本思想は、早く慶応三年に出版された「西洋事情外編」の中に見られる。この思想は後に「学問のすゝめ」と「文明論之概略」に結晶し、啓蒙思想家としての福沢の地位を確固不動のものとしたが、彼のその間にいたる人権思想そのものには、あまり大きな変化が認められない。

たとえば「天は人の上に人を造らず……」と云う平等思想は「西洋事情外編」では、「天より人に生を与れば其生を保つ可きの才力を与ふ。然れども人若し其天与の才力を活用するに当って、心身の自由を得ざれば才力共に用を為さず、故に世界中何等の国たるを論ぜず、何等の人種たるを問はず、人々自から其身軀を自由にするは天道の法則なり、即ち人は其人の人にして猶天下の天下なりと云ふが如し。其生るゝや束縛せらるゝことなく、天より附与せられたる自主自由の通義は売る可らず、亦買ふ可らず。」と述べ、又「小児と云ひ、大人と云ひ、乞食と云ひ、富豪と云ふも其生命の貴きは同一なり。貧兒の一敝衣も法を以て之を護るに至ては、諸侯の領地に比して孰か軽重の別なし。」と法の前の平等を主張して人間の基本権を造物主の与えた「万民同一轍の通義」と規定した。（「西洋事情外編卷一、人生の通義及び其職分」。）

外編の「題言」によれば、先に出版し、世の好評を博しつつあった「西洋事情」は、単なるヨーロッパの見聞記、紹介等に過ぎなかった。そこで、進んで西洋文明諸国の「柱礎屋壁の構成」を示さんものと、「英人チャンプル氏の経済書を訳し、傍ら諸書を鈔訳して成ったものが、此外編三卷である。読者はこれを「西洋事情」の「綱領」と看做せとある所からして、「外編」は翻譯とは云え、福沢の共鳴する人権に関する最初の根本思想と考えてよいであろう。右の事情か

ら、総じて彼の人権説は翻訳調の匂いが強く実感に乏しい。これは「学問のすゝめ」に迄流れている彼の自由思想の特徴といふべきであらうか。「学問のすゝめ」に比べると「外編」の方は不消化であるが、寧ろ素朴で概括的な長所を持っている。

「外編」の冒頭は「人間」と題し、人間の本质は天の賦与せる気力と性質によつて自主独立し、何人にも左右されず我身命を全うすべきものとする。その為には「先づ我心身を勞せざる可らず、千辛万苦を憚る勿れ。人生勞せざれば功なし。」と人間存立の基本条件を人間の労働に求めた。衣食足つて礼節を知る。時代の要求する「高尚な人間」となる為には、経済的独立が先決問題である。この考えは「学問のすゝめ」に於て次のように整理された。「独立に二様あり。一は有形なり、一は無形なり。尙手近く云へば、品物に就ての独立と、精神に就ての独立と二様に區別あるなり。品物に就ての独立とは、世間の人が銘々に身代を持ち、銘々に家業を勤めて、他人の世話厄介にならぬ様一身一家内の始末をするこゝにて、一口に申せば人に物を貰はぬと云ふ義なり。」（「学問のすゝめ」第十六編、手近く独立を守る事。明治九年）

福沢のように貧乏士族の家に生れ、幼にして父を喪い、生活苦に追われて母を助け、家庭の雑用は云うに及ばず、下駄の鼻緒づくり、その製作修理、桶の篩入れ、刀劍細工、金物細工等の内職は勿論、「畑もすれば米も搗き、飯も炊き、鄙事多能、あらん限りの辛苦」を重ね、苦学力行、血のにじむ学問の研鑽を通じ、遂に「他人の世話厄介にならず」（自伝）生涯借財を最大の敵とみて、自己の高潔な生活を守り抜いた人間にとつて、始めて労働の価値が認識され、又この労働を以て人間独立の前提条件とする事が出来たのであらう。此の場合、仮令他人に雇われて働くとも、少しも卑下する理由はない。何となれば、俸給は正當な労働の対価に過ぎないからである。「今給料を受けて人に奉公する者は、或は其身不自由なるに似たれども、其実は然らず。奉公の人にて、其身躰は其人の身躰にて、煩勞の代には給料を受け、一身の処置を爲すに他より之を間然する者あることなし。」（「西洋事情外編卷二」人生の通義及び其職分）これ即ち「人民普通の自由」なりと断定した。この考えは譚詠を通じてであるにもせよ、労働を媒介とする雇傭の対等な人間關係を、指摘強調したものとして注目すべきものである。但し、この考えは後年何等の發展をも遂げず、個人生活の独立という局面に限され、商品生産労働の価値から分離して不発弾に終つたのは惜しまれる。

とまれ、天の与えた健康な肉體を持ちながら、労働を忌避して遊惰に耽る者は、何処かで働いている誰かの労働を盗む

者といふべきである。「若し人をして自から衣食住を給するの道を知らずして、他人の煩を為し、徒に我自由を求め、我通義を達せんとするは、即ち人の功を盗むなり……本来人間の大義を論ずれば、人々互に其便利を謀て一般の為に勤勞し、義氣を守り廉節を知り、勞すれば従て其報を得、不羈獨立以て世に処し、始て交際の道を全くす可きなり。……我一身も猶他人の如く心力を勞して世に存するを得るものと思ふ可し。然るに今懶惰無為にして世を渡らんとするは即ち他人をして一倍の勞を為さしめ、竊に其功を盗むにあらずや」(「西洋事情外編卷一」人生の通義及び其職分)

此の観点から福沢の目が一度當時の消費階級たる武士に向けられた時、その攻撃はまことに熾烈を極めた。嘗て上級武士に抑圧されて、門閥制度を「親の仇」と思った程に、武士階級は無用の長物であり、且憎むべき存在である。「大凡天下の喰ひつふしにて近くは大名の家の邪魔ものたるは世祿の臣を最とす。一人にても減少こそ天下の幸福……小生……唯世祿を嫌ふのみ。功なくして空しく給料を食する者を惡むのみ。」(服部五郎兵衛宛書翰、明治二年八月)

福沢は自ら勞働せずして、「物をたゞで貰ふ」世界に最大の罪惡を見た。物の交換に物を以てしなければ、それに代えるに精神の服従を以てするの外はない。かくて主君からの恩恵に對する代価は、卑屈・妄従・阿諛・迫縦を以て支払われる。武士の凡ゆる背徳性の根源はここに胚胎する。表面高潔に見える武士階級も、一皮剥けば偽詐・諂諛、まるでゴム人形のように、權威に對しては一たまりもなく縮み上るくせに、弱いと見ると忽ち威丈高となつて膨張する。一般に支配者の世界に通用する道德的規範は、そのまゝ全社会を風靡規制するものである。かくて生れた「権力の偏重」は百姓町人の世界にも残る限なく滲透して、日本社会最大の弊害となつた。福沢が日本の文明化の為に、過去の封建的弊風を「掃除破壊」して獨立意識を昂揚せしめようとした時、全精力を傾けたのは実に此の点であつた。勞働の結晶を他人に求めて自らの獨立を失つた武士は(「文明論之概略・日本の明之由来」)やがて勞働の価値を忘れたのみか、勞働する百姓町人をも輕蔑した。

彼等の如く、父祖の「恩沢」に依頼して無為徒食する者のある限り、日本は自滅するの外はない。しかも日本の周囲には「觸るゝ所は恰も土地の生力を絶ち、草も木も其成長を遂ること能はず、甚しきは其人種を殲すに至る。」(同上)貪欲な帝國主義列強が機會を狙っているではないか。このままで行けば、日本は第二のインドとなるかもしれない。然るに將來日本を脊負うべき唯一の知識階級たる武士は、無為にして惰眠を貪っている。「我身天地の間に生じ、世間に益するこ

となくし、却て世間の物を衣食するは、他人をして一倍の勞を為さしめ、暗に其勞を盜むにあらずや。士君子の恥づべきこと也。今日武家の食する米も名は其家祿といふも、其実を尋ねれば粒々は皆下民の膏血、身に尺寸の功勞なくして、却て無辜の小民を役し、躬ら逸居して教なきが如きは、廉恥の道に離るゝこと遠しと云ふべし。」〔中津市学校の設立趣意書〕、明治四年。「石河幹明、福沢諭吉伝」という徹しい批判は、近代社会を担う全く新しい生産階級の立場から、既に社会進歩の極桔と化した過去の封建支配者に対する爆弾的宣言であつた。尤も此の宣言はヨーロッパの近代市民の様に、封建支配者に真向から対立するものではなく、当時の知識階級として日本文明の推進に、彼が満身の期待をかけた武士階級に向つて、深刻な反省と独立心の覺醒を求めたものと見るべきであらう。

福沢の思想は常に彼自身の実践によつて裏打されてゐた。之こそ福沢の生涯を通ずる特異点で、ヒューマニストとしての福沢の価値を決定する重要な鍵である。明治二年、旧藩主奥平が福沢を取立て祿を与えようとした時の態度は、その代表的なものである。「利祿は人の欲する所、小生と雖ども其祿はほしく思ひ候。独り如何せん。一片の天理、假令君公一万石の祿を半にして五千石を給せらるゝとも、理を捨て祿を取ること能はず。」と断然拒絶、「不分明なる理に基き百石や式百石の世祿を以て一身の面目を汚し、世間に一の惡例を遺し候儀は死を守て不致積に御座候。」と決意の程を見せた。当時彼の経営する義塾も、維新の騒亂を受けて経営不振の状態にあり、彼の生活を支えた唯一の著作収入も思わしからず更に最愛の老母が郷里にあつて、ひそかに諭吉の受諾を希望していた事等を合せ考える時、彼の信念の強固さに一驚を喫する。手紙は、「此の一条に至候ては母の意に戻り、親類、朋友の御同心を犯すとも確固不拔、小生の心は動き不申。」（服部五郎兵衛宛、明治二年八月）と結ばれてゐるのは流石である。

二

しかし、彼は凡ゆる職業における労働の価値を、平等無条件に認めたわけではない。そこには彼の立場を反映した大小輕重の別がある。彼の最も重んずる労働は、人類文明推進の原動力として彼が捉えた「高尚な」、知的なものでなくてはならぬ。彼は従来武士階級が、「遊民」として輕蔑した商工の生産性を主張し、「工商は決して逸民に非ず、農と工商とは正しく利害を共にして、共に国内有用の事業を為すものなれば、……双方共に国財を蓄積する種類の人民」であるに反

し、武士は「国財費散の種族」といふべきもので、兩者互に相補つて経済生活を全うする。所が日本では兩者の間に連絡なく、生産者は財を生産するのみで行方を知らず、費散者は徒に浪費するのみで経済、文化の進歩の爲に使用する道を知らぬ。尙又、従来の百姓町人中には、往々節儉勤勉以て巨万の富を致す者なきにしも非ずであるが、彼等は富そのものを目的とし、之を用いて「學術以上人心の高尙な部分に役立てる術を知らない。実に彼等は單なる金銭の奴隸たるのみで無學無術の野人に過ぎず、「品行の鄙劣にして敢爲の氣象なきは真に賤むに堪えたるもの。」「唯錢を好み肉体の欲に奉ずるの元素ある」丈だと痛罵した。（日本文明之由来）此の場合、福沢の攻撃目標は専ら封建社会につながる商業資本家、高利貸資本家の歪んだ姿に向けられた。流通部に利潤を追求して、享樂的な消費生活に終る前期的資本家は、まさに「賤しむべき」ものである。之に代るべきものは、新しい自然科学的知識を身につけ、之を産業部に適用して未來の文明社会を形成する独立自営の産業資本家層でなくてはならぬ。「国の文明は上政府より起る可らず、下小民より生ず可らず。必ずその中間より興て衆庶の向ふ所を示し……蒸氣機関は「ワット」の發明なり。鐵道は「ステフェンソン」の工夫なり。始て経済の定則を論じ、商売の法を一変したるは「アダムスミス」の功なり。この諸大家は所謂「ミッツルカラッス」なる者にて、国の執政に非ず、亦力役の小民に非ず。正に国人の中等に位し、智力を以て一世を指揮したる者なり。其工夫發明先づ一人の心に成れば、これを公にして實地に施すには私立の社交を結び、益其事を盛大にして人民無量の幸福を万世に遺すなり。」（「學問のすゝめ」第五編）

かくの如き「中産階級」の養成こそは、政府の保護に頼らず、民間に独立独歩する慶応義塾の真面目であり、將來日本文明の脊骨となる者は、我社中の同人でなければならぬとは、福沢の早くからいだいた強い信念であった。「今我國に於て彼の「ミッツルカラッス」の地位に居り、文明を首唱して国の独立を維持す可き者は唯一種の學者あるのみ。」（同）或は唯有望の人物にして始て読書中に商売を爲し、商売中に書を読み、學で富み富て學び、學者と金持と兩様の地位を占め、以て天下の人心を一変するを得べきなり。」（中上川彦次郎宛、明治六年七月）「學問と商業とは混同不致ては不相叶次第」（松田道之助宛、明治六年十一月）といふ「岩崎弥太郎は船士を作り、福沢諭吉は學士を作る。海の船士と陸の學士と固より輕重あるべからず。」（井上馨宛、明治十二年二月）等、彼の意図する高尙な職業乃至労働は何であつたかを知るべきである。この萌芽は頗る古く、彼の青年時代、將來の希望を兄に問われ「左様さ、先づ日本一の大金持になつて思ふさま

金を使ふて見やうと思ひます。」と答えて孝弟忠信一本槍の兄の怒りを買ったという。(自伝)点にも現われている。

右のような観点に立つと、知を伴わぬ、単なる筋肉労働は文明の進歩に直接の貢獻薄く、従つて価値の低いものである。彼は先天的な人間の差別を否定したが、學問による後天的な差別を主張し、今捨てたばかりの貴賤貧富上下の身分觀を再び拾ひ上げた。「西洋事情外編卷一、貴賤貧富の別」無知は貧困の原因であり、又彼等は下人であり賤しい存在である。しかも此の無知な人間が同時に惡人に等しと置かれるに至つては、全く以て無産者たるものは浮ばれまい。「人に知識なければ必ず惡事を爲すものなり」(「西洋事情外編卷二、政府の種類」額に汗して汝のバンを得よという諺があるが、單に働いて食を得るのみならば禽獸虫魚に異ならず、蓄積の点よりは蟻にも劣る。この様な無知低級の間人は社会の害毒である。「國に無智文盲の人民多きは、其害挙て云ふ可らず、此輩は是非を別たず、曲直を弁ぜず、國法に従て私財を保つ所以の理を知らずして、一旦國に騒亂あれば、忽ち其變に乗じて雲集蜂起し、法をも恐れず人をも憚らず、慘酷凶惡至らざる所なし。其一例を挙て云はんに、昔日仏蘭西騒亂のときに恐る可き暴行を爲せし輩は、皆無學文盲放蕩無賴、良政府の下に居ては活計を営こと能はざる者なり。」又、ラッダイト運動を目して「小民徒党を結て精巧なる機關を毀ち、或は其發明家の功德を謝せずして、却て之を凌辱せしこと屢々これあり。是れ皆無智文盲の然らしむ所なり」(同)彼によれば無智の貧民は凡ゆる罪惡の一手販売人である。彼は資本主義的生産の發展、即ち文明の發達に余りにも大きな幻影をいだき過ぎ、その商品を生産し、機械を動かす人間や、凡ての人間の生命を支える食糧の生産に従事する農民労働の価値を、正當に評價する違を持たなかつた。この頃、ヨーロッパ諸國にては、資本主義の勃興に伴う無産階級の抬頭が、既に社会を動揺させつゝあり、その状態を反映して、労働者階級憎惡の思想が上層社会に広まり、それが翻訳を通じ、尙労働者未發生の日本の社会に觀念的に適用されたのみならず、福沢生來の武家意識が潜在的にいだいていた農民・労働者輕蔑の思想に遷し植えられ、一層強烈なものとなつたのであらう。この考えは「學問のすゝめ」に至つていよいよ動かし難いものとなつた。人は「生れながら貴賤上下の差別なく」と断言した口の下から、「世の中にむつかしき仕事もあり、やすき仕事もあり、其むつかしき仕事をする者を身分重き人と名づけ、やすき仕事をする者を身分輕き人と云ふ。都て心を用ひ、心配する仕事はむつかしく、手足を用る力役はやすし。故に医者・學者・政府の役人、又は大いなる商売をする町人、夥多の奉公人を召使ふ大百姓などは、身分重くして貴き者と云ふべし。…唯學問を勤て物事をよく知る者は貴人となり、富人とな

り、無学なる者は貧人となり下人となるなり。」〔「学問のすゝめ」初編〕「農たらば大農と為れ、商たらば大商と為れ。」（同十編）「役者たるを好まずして学者たるを勤め、車挽の仲間に入らずして航海の術を学び、百姓の仕事に不満足なりとして著者の業に従事するが如きは、働の大小軽重を弁別し、軽小を捨て重大に従ふものなり、人間の美事と云ふ可し。」等の表現に至る所に見出す。「上流の人物」、「高尚なる人間」は決してかゝる賤しい「力役」に従わぬ。無知の民即ち悪人という考え方も慶応末年と何等の変化もない。否、「学問のすゝめ」に至ってより一層徹底したのは、次の文を比較すれば明かであらう。

「無智文盲理非の理の字も知らず、身に覺えたる芸は飲食と寝ると起るとのみ、其無学のくせに慾は深く……所謂恥も法も知らざる馬鹿者にて、其子孫繁昌すれば一国の益は、為さずして却て害を為す者なきに非ず。斯る馬鹿者を取扱ふには逆も道理を以てす可らず；他人にけしかけられて暗殺を企る者あり、新法を誤解して一揆を起す者あり、強訴を名として金持の家を毀ち、酒を呑み、錢を盗む者あり、其挙動は殆ど人間の所業と思はれず。」など、ありと凡ゆる罵詈雑言を、所嫌わず吐き散らすに至っては又何をか云わんやである。十九世紀後半の日本最大の思想家のこの言葉と、それより六百年も前の十三世紀のイギリスの思想家の發言を比較する時、そのあまりにも大きな差に驚くであらう。「人々が賢明になればなるほど、ますます、彼等は腰を低くして、他人から学ぼうとする。彼らは、自分たちに教えてくれる人たちの単純さを、輕蔑したりはしない。彼らは、農夫や、貧しい女や、子供たちの水準にまで喜んで身を低める。賢明な人たちの注意をひかないような、單純で無学な人たちには、沢山なことが知られているものだ。……私は有名な博士たちからよりも、学校ではその名も知られていないような、身分の低い人たちから、比較にならないほどに大切な真理を、学んできたのである。」（ロージャー・ベークン、桑原武夫編「二日一言」）同書の中には、維新当時福沢は政府の招きを断り、「政府から、君が国家に尽した功勞を誉めるやうにしなければならぬと云ふから、私は自分の説を主張して、誉めるの誉められぬのと、全体ソリヤ何の事だ、人間が人間当前の仕事をして居るに何も不思議はない。車屋は車を挽き、豆腐屋は豆腐を拵へて、書生は書を読むと云ふのは、人間当前の仕事として居るのだ。其仕事をして居るのを政府が誉めると云ふなら、先づ隣の豆腐屋から誉めて貰はなければならぬ。ソんな事は一切止しなさいと云て断ったことがある。是れも随分暴論である。」という「自伝」の一箇所が引用されてある。一見、凡ゆる職業の平等を認めたかのようなうであるが、暗に「豆腐屋

のような賤業を誉める事は出来まい、」という自己の業績に対する自尊心を殊更に打出す為、民主的な理論を以て相手を封じたという感がある。「是れも随分暴論である。」と抑えた最後の一句が味わるべきである。福沢は農民や無産市民の労働の苦痛、又それに対する報酬の少くして、生活苦に呻吟する様を主張する場合、大抵攻撃目標は別にあった。「汗を流して家業を営み、一銭づゝ貯へたる金をも、かしこき處にさらはるゝ如く、いつの間にか取上げ」(「学問のすゝめ」)るとか、「今日武家の食する米も、名は其家祿といふも、其実を尋ねれば粒々皆下民の膏血。」(前出)等すべて旧封建支配者攻撃の一段に過ぎなかつたと見るのは果して酷評であらうか。

兎もあれ、福沢が生れ乍らの身分差別を一応否定しながら、改めて学問による貴賤上下の身分秩序を設定したのは、一方で旧封建階級制度を否定し、四民平等を高唱しながら、他方、新しい華士族・平民の身分秩序を設定し、近代の紛装の蔭に隠れて、藩閥絶対権力を築き上げて行つた維新政府に、絶好の思想的根柢を与えたかに思われる。この事は又一面、彼の処世哲学―適当な進歩思想をいだき乍ら、常に社会の流れに添って柔剛自在の妥協を拒まぬ態度―にも関連する問題であらう。このタイプは後年の日本インテリに一つの機會主義的流れを残した。「町人論吉」、「町人の装をした武士」、「資本主義イデオログ」、「日和見主義者」、「絶対主義的思想家」、「啓蒙主義者」、「貴族的民主々義者」、「君主論者」、「共和主義者」等々彼に対する評価の区々であるのは故なき事ではない。

とは云うものの、明治維新のきびしい國際的環境下に、封建社会そのままの國民と、それを絶対主義権力下に再編成して、近代日本を形成しようとする藩閥政府との間にあって、自らも傷つくことなく、殆んどすれ／＼の線上に人權を主張することは難事中の難事である。特に青年時代を封建武士の枠内に生長した福沢に、あれ以上を求めるのは無理というものであらう。